



馬耳東風

マレーシアの首都、クアラルンプールで7月18日～21日に開催された第12回 FASAVA (Federation of Asian Small Animal Veterinary Associations) 年次大会に参加してきた。

今回の日本からの参加者は58名。

筆者が初めて参加したのは2013年、ニュージーランドオークランドで開催された第4回大会。

当時、日本からの参加者はわずか数名だったことを思うと隔世の感がある。

FASAVAは2007年にアジア・オセアニア地域の小動物医療の充実、発展を目指す共通のフォーラムとして機能することを目指してスタートしたわけだが、そこから約17年、急速に発展する当該エリアにおいて確固たる地位を築きつつあると今回参加してみて強く感じた。

参加者からも「想像以上にアジア各国の小動物医療に対する熱意、期待を感じる」「最新の情報をキャッチしようとする熱量がすごい」「マーケットとして考えると、もはや無視できない」「程度の差こそあれ、みんな、英語で必死にコミュニケーションを取っている」「とにかくみんな若い」等々、どちらかというところと驚きに近い感想が多かった。

そして、筆者がもっとも印象的だったのは参加者それぞれがとても前向きに未来に期待を寄せていることだ。自分たちの関わっている業界がこれから大きく発展し、自分もその一員になって行く、そこを信じて疑わない姿がとてもまぶしく、うらやましさを感じた。

そして同時にこの感覚をわが業界の若い世代が持っているのか、また、持つためにはどうしたらよいかを深く考えさせられた。

あるASEAN地域の参加者からは、欧米から技術やハード面の提供はたくさんあるが、私たちは医療に対する考え方、その実践・継続する方法はぜひ日本から学びたいと言われたことがとても印象的だった。

その言葉はお世辞かもしれないが、われわれが今まで歩んできた道が認められたような気がしてなんだか嬉しくなったと同時に、その期待に応える事の必要性を感じた。

その一方で、このような彼らの期待はいつまで続くのか、われわれはどこまで応えて行けるのかと、ふと不安になった。

めまぐるしく変化するグローバル社会の中で、現在のわれわれの優位性の賞味期限も意識しなければならない。

そして、小動物の世界で急速に発展しようとしているアジア・オセアニア地域の各国にはさまざまな思惑がある事を忘れてはならない。

思惑とは当該地域、業界における政治的立場、学術、ビジネスにおけるリーダーシップ等々。

各国がその思惑の中で積極的にコミュニケーションを図り、議論を重ねて行く姿を目の当たりにすると、われわれはしっかりそこに対応できているのか、世界で今まさに起こっていることをしっかり把握し、その上で戦略を立てることができているのかと大きな不安に駆り立てられる。

島国育ちのわれわれには何とも苦手な作業だが、もはやここは避けて通れない事は明らかである。

人類史上かつてない少子高齢化に突き進むわが国、そしてわが業界、今まで培ってきた経験、技術を総動員してグローバルに業界の発展に貢献し、世界の中で生き残る方策を真剣に考えなければと強く思う大会参加であった。

(も)